
俺は彼女がいない

kiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は彼女がない

【Nコード】

N1422Z

【作者名】

kiki

【あらすじ】

テーマは姉の愛情です。
重複投稿です。

俺は彼女が欲しかった。この十七年間、一度も付き合った女の子はいない。

なぜだ？ 意味がわからない。ノストラダムスの予言が当たらなかったのは頷けるが、俺に彼女が出来ないのはおかしい。そうか、照れてるんだな。付き合いたくてしょうがないのに、俺のレベルが高いから誰も声をかけられない。なるほど納得だ。

今年も何事もなくクリスマスを過ごすことになりそうだ。同級生の中には彼女といちゃつく野郎がいて不愉快極まりない。そこで俺は決意を固めた。

来年、来年こそは彼女を作ってやる！

「無理だね」

自宅で夕飯を食べている時だった。そう言ったのは俺の一つ年上の姉だ。同じ高校に通っている三年生。受験勉強もせず家でごろごろしている姿をよく見る。そんな彼女に俺は悩みを打ち明けていた。

「なんでだよ？」

俺は怒気を含んで言った。彼女は平気な顔をしてコロッケを口に運ぶ。

「あんた魅力ないし」

心臓にぐさつと何かが刺さった。この姉。言う事がマジで容赦ない。

「何より積極性がない。待ってたら向こうから誘いが来ると思ってるの？ マジで意味がわからない。もてないって言う奴に限ってそっなのよ。もてないんじゃないかと、行動してないだけよね？」

「……」

反論できなかった。まあその通りだよ。クソ姉貴。

「あんたが彼女できない方に百万かけてもいいよ」

「むぐぐ。言ったな。本当に百万もらうぜ？ いいんだな？」

「いいわよ。別に。あ、心配しないで。あんたが負けても払えなんて言わないから」

余裕の表情を見せると、最後にキャベツを口に放り込んで席を立った。

「見てろよ。必ず作ってやる！ そして見返してやる！ どうせ百万なんて払えないんだろ？ とか言ってやる！」

次の日からさっそく俺は行動を開始した。その行動とは手当たりアタック法だ。これは、とりあえず好みの女の子に手当たりしだい告白し、振られたら次の子、また振られたら次の子という感じで、OKが出る子まで続ける方法である。落ち込んでいる暇もなく行動する事で、鋼の精神が必要になってくる。おそらく十人いれば二人ぐらいは俺の事を好きな子に引つかかるだろう。脳内シミュレート完了。いざ戦場へ！

「俺と付き合っ」

「ごめんなさい」

瞬殺。これで十人目。死にたくなってきた。ごめんなさいじやねーよ！俺のどこが悪いんだよ。性格か？ やっぱり容姿か？廊下でそんな事を考えている時に友人のケイが歩いてきた。彼は俺の姉とも仲が良い。

「よお。カツヤ。お前ズボンのチャック開いてるぞ」

「げっ！」

全開だった。え？マジで？どこから？学校でトイレには行ってない。ということは家からか！最悪だ！

急いでチャックを引き上げた。あれ？おかしいな。目からじわっと汗が。

「何泣いてんだよ。お前は」

「うるせえ。ほっといてくれ」

俺はふらふらと屋上に向かって歩き出した。

「どこに行くんだ？」

ケイの言葉を返さずに階段を上がっていく。

屋上へ辿り着いてドアを開けた。強い風が俺の濡れた顔に吹き付ける。

「待てよ。カツヤ。どうしたってんだ？ 理由を話せよ」

「いいんだ。もう過ぎた事だ」

くるつと反転してケイを見た。俺よりも断然良いルックス。運動神経抜群で、成績もクラスで常にトップだ。神は不公平すぎる。二物を与えすぎだ。与えないものにはとことん与えない。優劣をつけて楽しんでいるのか？ だとしたらふざけすぎている。

「心配すんなよ。頭を冷やしにここに来ただけさ」

「そうか……」

そう言うと、ケイは隣に来た。

そういえば、何でこいつは俺みたいな平凡野郎の友達でいてくれるんだ？ 普通こつという奴って相手を選ぶんじゃないのか？ それとも何か別の理由があるのだろうか。

「なあ。ケイ」

「なんだよ」

「お前。実はホモじゃないだろうな」

「は？ お……お、おま、お前。な……な、なに、なにをわけわからん事を」

「ちよつと待て！ 何だその動揺っぷりは！」

「冗談だ」

ケイはにやりと笑った。俺は心底ホツとした。神はこいつに変なものも一物与えたんじゃないかと思ってしまった。

「教室戻るわ」

俺は精神的に疲れていた。いまずぐに机に突っ伏して寝たい。全てを忘れたい。

「まあ待てよ。会わせたい人がいるんだ。ついて来てくれ」

「え？」

ケイは手招きして屋上のドアを開き、下の階へ降りていく。俺も後に続いた。

「何だよ。会わせたい人って？」

「来ればわかるって」

ケイの足が止まった。ここは校舎裏の人通りが少ない場所だ。周りを木に囲まれたここは外からも見えにくい。そこに、女の子が一人緊張した面持ちで立っていた。彼はその子に何か語りかけている。女の子はこくと頷いて俺の近くまでゆつくりと近づいてきた。

「カツヤ。お前この子に話があるんだろ？」

「はあ？ おいちよつと待て！」

ケイは手を振ってそそくさと退場した。

なにこれ？ 何かの罰ゲームか？ というか誰？ この子。

何気なく女の子に視線を移した。

どこかで見た事がある顔だった。大きく丸い目、整った目鼻立ち。魅力的な唇。腰まで伸びた美しい髪には白い小さな花の髪留めがしてあった。

ああ、思い出した。確か以前、通学路で見かけたときに可愛いなと俺が言った子だ。その時にケイもいた。って事はどういう事だ？ えっと、つまり……。これはケイが俺のために用意してくれたステージって事か？ 告白しろって事か？ でも、また振られるんじゃないか？ いや、待てよ。じゃあ何でこの子はここにいるんだ？ 事前にケイから話があつたはずだ。俺がこの子に好意を寄せていると！ そうだ。そうに違いない。

俺は生唾をこくりと飲み込んだ。

「お、お……俺と付き合ってください！」

「……はい」

女の子は赤い顔をして小さく頷いた。

その瞬間、天にも昇るような気持ちになった。喜びのあまり、そ

の後の事はあまり覚えてない。とにかく嬉しかった。あまり有頂天になりすぎて車に轢かれそうになった。まあいいさ。今の俺は細かい事は気にしない。俺の勝ち組人生が幕を開けたのさ。

でも、何でケイがここまでしてくれたんだろう？ 用意が良すぎる。誰かがケイに頼んだのだろうか？ まさかな？ とにかく俺はこれで姉に堂々と言ってやれる。ざまあみるコンチクショー！

「どうせ長く続かないわよ」

自宅で夕飯を食べている時だった。さっそく姉に彼女ができたと言ってやった直後だ。

「続くよ！ ずっと！ それより百万払えよ！ どうせないんだろ？」

俺は小馬鹿にしたように言った。彼女は平気な顔をしてカレーを口に運ぶ。

「わかったわ」

「え？」

彼女は席を立って部屋に行くと、すぐに戻ってきた。手に持った札束を机の上に置いた。

マジか。どこでこんな大金……って子供銀行券かいっ！

俺は札束を投げ返した。

「そんな事だろうと思ったよ」

そう言って残りのカレーを口に入れる。お茶を一気に飲んで席を立った。

部屋を出て行く時、姉の『がんばれ』という声が聞こえたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1422z/>

俺は彼女がいない

2011年12月5日00時54分発行